

1 取組のねらいや内容

(1) テーマの設定理由

本事業は、「総合的な学習の時間」との関連を図りながら、本校の教育目標を具現化することを目指し、次のことに重点を置いている。

- ア 豊かな体験活動を通して、「明るい心、素直な心」をもつ豊かな人間性をはぐくむ。
- イ 豊かな体験活動を通して、主体的に対応できる「たくましく生きる力」の育成を目指す。
- ウ 豊かな体験活動を通して、自ら学び、自ら考える生徒の育成を目指す。

(2) 地域連携を学校経営の柱に

本校は自主性・自律性を発揮し、地域社会との連携を図りながら、「開かれた学校づくり」を進めている。

そのため、学校の教育目標を改定するとともに、地域の人材や資源を活用し、学校の教育課程を充実させたり、学校が地域の行事や活動に参加し、地域社会の活性化に寄与したりするなど、これまで以上に価値ある体験活動を推進することとした。

さらに、学校経営方針の具現化を右の図のように示し、教職員や保護者、地域住民等との共通理解を図るよう努めている。

学校経営方針の具現化 (抜粋)

3 地域に根ざす信頼される学校の創造(開かれた学校づくり)

(1) 家庭・地域との強力な連携を図り、信頼される学校経営を推進する。

- ア 学校の施設を可能な限り地域に開放する姿勢に立つ。
- イ 学校への期待の大きさを認識し、学校のパートナーである保護者や地域の声に耳を傾ける。
- ウ 広報活動の充実に努め、教育活動の計画・実践・成果などの説明責任を果たす。
- エ 学校行事や授業など、教育活動を保護者や地域に公開し、学習の相乗効果を期待する。
- オ 教職員の専門的な知識・技能を地域に還元し、地域の活性化に寄与する。

(2) 地域に根を張る教育の実現を目指す。

- ア 地域の教育資源や人材の活用を図り、特色ある授業を構築する。
- イ 「総合的な学習の時間」における民間講師による授業の充実を図る。

(3) 中学校や関係機関への情報提供に努める。

- ア 教育の内容に関わる情報を積極的に提供し、本校のよさや生徒の状況を知らせる。
- イ 学校紹介の充実を図り、生徒の確保に努める。

(4) 本校の近未来を考える組織をつくり、調査研究・意見交換の機会を拡大する。

- ア 村教委との連携の下、村内有識者による「将来構想検討懇談会(仮称)」を組織化する。
- イ 家庭科専門高校としての資格取得について、調査研究を進める。

2 教育課程上の位置付け

(1) 「総合的な学習の時間」における体験活動の推進

本校では、移行措置として平成13年度から「総合的な学習の時間」を実施してきた。「豊かな体験活動推進事業」と本校の「総合的な学習の時間」の趣旨が共通する面があることから、大部分を関連付けて実施することとした。

(2) 完全学校週5日制に対応した二学期制の導入

本校では、本年度から二学期制を導入している。

昨年度9月から、検討プロジェクトチームを作り、本校独自の完全学校週5日制の在り方を検討してきたが、授業時数を確保し生徒の確かな学力の向上を図るためには、二学期制を導入することが有効であると考えた。

二学期制の導入に当たっては、「ゆとりの中で生きる力をはぐくむ」ことを基本理念とした。

「ゆとり」を「じっくりと丁寧に」ととらえ、「授業時数を確保し、基礎・基本を確実に定着させる」ことに結び付けることを大きなねらいとした。

このため、夏季・冬季休業前後の集会活動をロングホームルームの時間として実施し、定期考査を年間4回に縮減するなど授業時数の確保に努め、生徒個々の学習経験、習熟や理解の程度に応じて、基礎

的・基本的な内容を習得させることを目指した。

また、学校行事の精選を行い、地域ぐるみで体験活動を推進することにした。生徒が主体的に地域とかわりをもつことで、豊かな心をはじめとする「生きる力」を育成しようと考えた。

3 活動の概要（実施に当たり苦労した点や工夫した点）

（1）活動の概要と地域の講師・協力者等

本校は、総合的な学習の時間を中心に体験活動を実施し、多くの地域の人材が講師や協力者となって活動を支援している。

（2）地域の講師の活用にかかわる教職員の役割

次のような手順により、地域の人材を各体験活動の講師等として活用した。

- | | |
|---|---------------|
| ア | 開設講座の決定 |
| イ | 講師の選考、協力依頼 |
| ウ | 生徒への事前指導 |
| エ | 教育活動の実施、全体の掌握 |
| オ | 講師の支援補助 |
| カ | 生徒への事後指導 |

左の図のように、教職員は講師や生徒ときめ細かなかわりをもつよう努め、体験活動の充実を目指している。

（3）ビデオの有効活用

活動の実施に当たっては、各体験活動の様子をビデオ撮影し、それを視聴して、体験活動の改善に役立てている。また、ビデオの活用にあたっては、次のことに留意している。

- ア 生徒一人一人が主役となるよう編集する。
- イ 生徒の学校生活、学習活動の様子が十分わかるようにする。
 - （ア）学校説明会において説明資料として活用する。
 - （イ）地域住民に対する教育活動情報として活用する。
 - （ウ）中学校に配布し、生徒募集用に活用する。

4 活動の評価方法

学校評価も含め計画的な評価方法について検討中である。

5 活動の成果

（1）地域社会との連携の拡充

ア 専門教科における地域住民の講師としての活用

本校は生活ビジネス科の専門高校である。普通科とは異なり、専門性の育成が強く求められる。そのため、専門教科において、地域住民を講師として授業に活用し、生徒の専門的な知識・技能の習得の一助となるようにしている。

<地域の人材を活用した授業>

授業（講座名）	講 師	対 象	備 考
メイク	商店経営	3年生女子	2時間
手打ちそば	手打ちそば店経営	1年生	A・B班 各1回
魚料理	商店「ストア」経営	1、2年生	各学年1回
観光一般	食堂経営、元ホテル支配人	1年生	4時間
観光一般		1年生	4時間
旅行業務		2年生	4時間
旅行業務		2年生	4時間

イ 地域と連携した行事の拡充

（ア）花壇づくり

毎年5月に「洞爺村花いっぱい運動」の一環として、全校生徒による花壇づくりのボランティア活動を実施している。

本校は、洞爺湖温泉病院、北海道立洞爺少年自然の家（ネイパル洞爺）及び校舎前道道の3カ所を担当している。花の苗は、「総合的な学習の時間」で支援を得ている「洞爺村花いっぱい運動推進協議会」から提供を受けている。

（イ）クリーン洞爺（洞爺湖畔清掃）

毎年9月に村内の全小・中・高等学校の児童生徒が洞爺湖畔の観光施設やキャンプ場などに出向き、大掛かりな清掃をボランティア活動として実施している。

ウ 洞爺村長部局、洞爺村教育委員会の期待と支援

昨年、本校が制作した「学校紹介ビデオ」の編集技術が洞爺村の関係者から評価を受け、洞爺村の商工観光課の支援により本校のもつ専門的な知識・技術を活用し、「洞爺村の観光ビデオ」の制作を行うこととなった。

4月から本校の総務部が担当し、編集計画に基づいて資料・映像収集を始め、11月には「中間まとめ」として作品を洞爺村商工観光課に提出した。

ビデオの内容は、観光のみならず産業、行事や史跡などにも及ぶため、洞爺村内の多くの方々から情報を得る必要があった。この事業は、地域との連携を一層強め、生徒の地域理解を深めるよい機会となった。

また、本校は、本年度地元テレビが企画する「ふる里つながり北海道：うちの町のすごい人」に参加した。生徒が撮影し、テレビ局が編集する番組である。年3回の放映で、経費については洞爺村の全面的な支援を得ている。

エ 外郭団体との連携（教育振興会の活性化）

本校の「教育振興会」は、昭和45年に「洞爺高等学校教育の振興発展を図る」ことを目的に設立された。昭和45年は創立20周年の2年前に当たり、記念行事を実施する推進役として創設したと推察されるが、以後、学校の支援組織として存続問題や寄宿舎の設置などに力を発揮している。

近年、村内から通う生徒の激減に伴い、振興会の活動は停滞していた。村民の学校に対するかわりや期待が薄れてきたこと、振興会役員の高齢化が進んだことなどが大きな要因であった。

教育振興会には、「学校の応援団」としての役割や機能がある。地域ぐるみで豊かな体験活動を進めるためには、教育振興会を一層活性化し、その力を大きく活用することが必要であると考えた。

そのため、活性化を図る具体的な取組を行った。

- (ア) 役員改選に伴って、同窓会長と連携し、意欲ある人材を会長に推挙した。
- (イ) 組織の抜本的な見直しを図り、理事の委嘱と任務を明確化した。
- (ウ) 理事の委嘱に当たっては、21名全員に対し、会長と校長、教頭が直接訪問し、協力の要請を行った。
- (エ) 「洞爺高等学校教育振興会だより」を発行し、会の活動や学校の教育活動を地域に説明した。
- (オ) 学校行事や「洞爺DAY」などに積極的に協力していただいた。
- (カ) 学校の教育力を地域に還元するため、教育振興会の主催による村民対象の料理づくりやパソコンによる年賀状づくりの講習会を開催した。

(2) 教職員の意識の変化

ア 地域の行事等への積極的な参加

本校の教職員は、生徒の引率も含め本村で実施している様々な行事へ積極的に参加するとともに、村のサークル活動等へも自主的に参加するようになってきている。

イ 生徒へのきめ細かな指導の充実

生徒の立場に立って支援し、一人一人が目標や夢をもち、その実現に向けて取り組むことができるよう励ます姿が見られるようになった。

(3) 保護者の学校行事への参加

学校祭や月1回の土曜日に実施している「洞爺DAY」などに積極的に参加するよう、保護者に対して呼びかけを行った。本校の場合は、保護者が札幌などの遠方に居住しているため、学校行事等への参加は難しい状況にあるが、保護者が学校に足を運ぶことは地域の信頼を得ることにつながる。さらに、PTAの組織的な支援も期待できる。昨年度「PTA研修会」を実施し、PTAの結束を促した。

このことにより、学校の意図が伝わり、今年度はOB会員を含めて28名の保護者が参加するなど、増加の傾向にある。

8 今後の課題

(1) 単なるイベントとまらない体験活動の実施

これまで直接的な体験が少なかった生徒にとって、体験活動は、感動や心の揺さぶりとなり、学習意欲を引き出し、学校生活を豊かにしているという評価が得られている。しかし、体験活動がイベント的になっており、生徒が自ら学び、自ら考える力などの「生きる力」の基盤になるには不十分であるとの指摘もあり、今後の課題となっている。

(2) 魅力ある学校づくりと学校の存続

これからは、地域社会との連携の下、地域住民や行政を巻き込んだ将来構想の構築が必要であると考え、「洞爺高等学校の近未来を考える懇談会」を発足させた。

豊かな体験活動、アウトドアガイドの資格取得、調理師養成、あるいはコミュニティースクールや単位制高校への移行など、夢をもちながら本校独自の学校づくりを進めていく必要があると考えている。